



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 着生シダ、イワオモダカ( <i>Pyrrosia hastata</i> )の栽培                                         |
| Author(s)        | 津久井, 孝博                                                                           |
| Description      | 北海道大学農学部技術部職員研修(第4回) 研究・技術発表                                                      |
| Citation         | 北海道大学農学部技術部研究・技術報告, 3, 6-8                                                        |
| Issue Date       | 1996-03                                                                           |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/35306">https://hdl.handle.net/2115/35306</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 3_p6-8.pdf                                                                        |



## 着生シダ、イワオモダカ(*Pyrrosia hastata*)の栽培

附属植物園 津久井 孝博 (環境・飼育系 植物管理班)

はじめに

イワオモダカ(*Pyrrosia hastata*)は、ウラボシ科ヒトツバ属(*Pyrrosia*)に属する、樹幹や岩上に着生する常緑性のシダである。日本では本種の他に、ヒトツバマメヅタ(*P. adnascens*)、ヒトツバノキシノブ(*P. angustissima*)、ヒトツバ(*P. lingua*)、イワダレヒトツバ(*P. davidii*)、ビロードシダ(*P. linearifolia*)の5種が分布し(岩槻、1992)、北海道にはこのうち本種とビロードシダのみが分布する。

本属の葉の形態は、一般にイメージされるシダと大きく異なっており、全縁で単葉から掌状・ほこ状に分岐するなど様々なタイプがある。この点が古来から人々の興味の対象となり、シダの中でも栽培化が進んでいるグループのひとつである(岩槻、1992、高橋と久志、1992; 久志、1995)。

本道以外の地域では、本属のシダ以外にもシノブ、イワヒバなどの在来のシダの観賞価値が古来より見い出されており栽培が盛んである。しかし本道では、在来のシダが積極的に栽培されることは少ない。そこで本報では、北方シダの観賞価値の再認識のために、北海道に自生するヒトツバ属のひとつであるイワオモダカの栽培法について検討した。

材料

イワオモダカは北海道から九州の山岳地帯に生育するシダで短い根茎を持つ多年生草本である。北海道では道南・道央地方の山地に比較的多く分布し、河川沿いあるいは霧の多い地域の樹幹や岩上に生育する(図1a)。

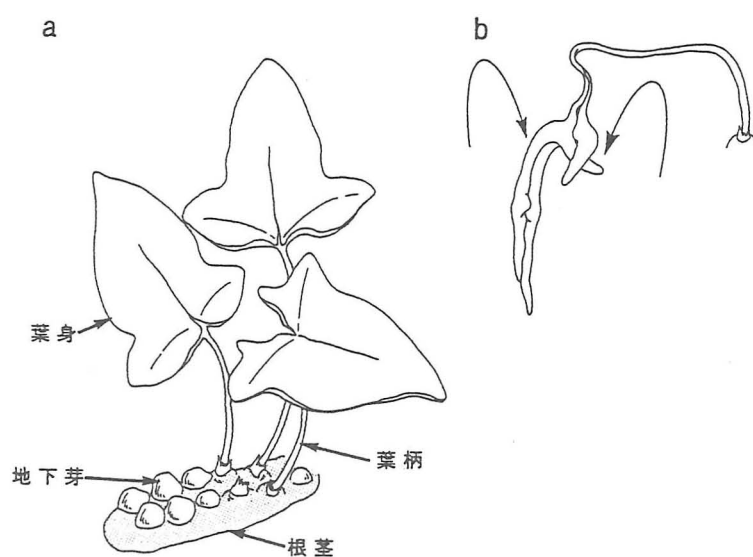


図1 イワオモダカの形態

a 模式図

b 乾燥時の葉の形態(葉の表面が内側に巻き込む)を示す。

今回の栽培方法の検討にあたっては、材料は製材用の伐木に着生していた株を採取したものを  
用いたが、これからの課題としては孢子からの繁殖方法の確立が必要である。

## 栽培方法

### 着生法

栽培方法としては鉢植えも適しているが、ヘゴや抗火石に着生させるスタイルも自生地の  
生育状況に対応しておもしろい。

図2に着生の方法を示した。第一段階として、根の活着を高めるために、根茎をミズゴケ  
で包み、これを半日陰の場所に吊るす。これをミズゴケボールと呼び（図2a）、適度な湿度  
を維持すると根が発達する（図2b）。この発根株をヘゴ付けすると生育がよい。

本種のヘゴへの着生方法として、発根株の根の部分のみをミズゴケで覆い、針金で固定する方  
法やステップル（電気配線の際に使用されるコの字型の釘）で止める方法（高橋と久志、  
1992）がある（図2c）。ただし、ある程度株が成長した段階でこの針を取り除く必要があ  
る。

また植え付けの際は、葉の向きや地下茎の向きを自生地での状態と同じように保つことが  
必要である。特に葉の向きを誤って植え付けると、その葉は枯死する場合がある。

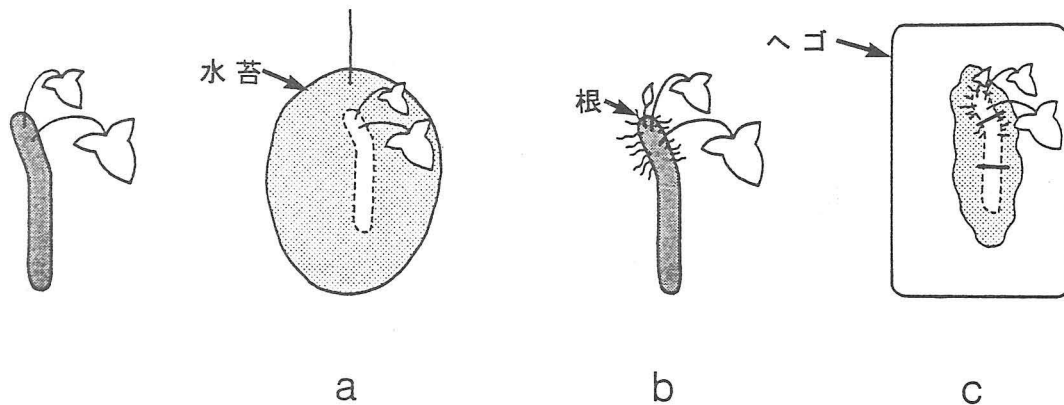


図2 イワオモダカの着生方法

- a 根茎を針金等を用いて水苔で覆う。
- b 発根した株
- c ヘゴに着生させる。

### 管理法

本種はその分布域の点から見て生育可能な温度の幅は広く、室内及び戸外での栽培両方に適し  
ており難しい温度管理は必要としないが、15–20℃の間の温度管理が栽培に妥当であると考えら  
れる。

植え付けた後しばらくの間は風の当たらない半日陰の場所に置く。その後の栽培条件として  
は、比較的日当たりが良く（夏は少し遮光）、風通しのよい場所がよいが（久志、1995）、葉の  
傷みが発生する場合は、風の当たらない場所に移動した方がよい。また展葉初期は葉がやわらか

いため、ナメクジやワラジムシ等の食害に注意する必要がある。

本種は、冬期間に葉を脱落させることなく、葉の表面を内側に巻いて越冬する（図 1b）。また乾燥期にも同様の形態をとり休眠することが知られている（ガーデンライフ、1976）。このことから本種は乾燥に強いタイプのシダであると考えられる。しかし葉傷みの防止という点から、空中湿度を高く保って栽培したほうがよい。また葉の色が退色した場合は、薄い液肥を葉面散布するとよい。

本種の栽培の目的は観葉であり、個々の葉の寿命はそれを左右する重要な要素のひとつである。植物園3号温室の栽培例で、葉の1枚の展葉期間は10ヶ月以上あった。この点から本種は長期間の観葉に適していると考えられる。

#### 参考文献

岩槻 邦男 1992 日本の野生植物 シダ 平凡社 東京

ガーデンライフ編 1976 ガーデンシリーズ山草の栽培 魅力と作り方誠文堂 東京

高橋 勝雄、久志 博信 1992 NHK趣味の園芸 新園芸相談⑦ 山野草 日本放送出版協会 東京

久志 博信 1995 山野草 早わかり百科 主婦と生活社 東京